

## 論文の内容の要旨

氏名：七海 絵里香

博士の専攻分野の名称：博士（生物資源科学）

論文題名：文化的景観を形成する人と植物の関係に関する緑地学的研究

### 背景と目的

人々は時代や地域ごとに植物との間に様々な関係を築き、植物を扱った文化や地域景観を形成してきた。そして、近年の生物多様性保全の重要性に加え、人の営みと関わりの深い文化的な植物およびその伝統的利用技術によって特徴付けられる地域景観（文化的景観）の保全・再形成が課題である。しかし、特に中山間域の人口減少と人間活動縮小や大規模合理化された農業の敷衍、伝統的な農的管理や生物資源利用によって維持されてきた豊かな植生景観は、現在減少傾向にある。このような状況の中、文化庁は文化財保護法（2005年施行）の中で文化的景観を「地域における人々の生活または生業および当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活または生業の理解のために欠くことのできないもの」と定義し、文化的景観が文化財であることを明確化した。そこで本研究では、利用・観賞・管理されてきた植物に注目し、事例対象植物や地域景観を通じて、その生育環境および文化的変遷（関わりの歴史、土地利用）を調査研究することで、文化的景観の再評価や形成の可能性を検討することを目的とした。すなわち①歴史的資料からの時代毎の植物との関わりの変遷、②秋の七草の里山空間での生育立地及び生態的特性（農的攪乱との関係）の把握、③栽培植物の資源利用の歴史や地域景観の変遷の検討、④畦畔植生の表土移植による植生復元試験等を行った。これらにより、利用・観賞されることで人里周辺に生育してきた植物・植生の利用及び生育立地の変遷、生態的特性（人為的管理との関係）の把握、生育場所の保全及び復元手法等を検討し、文化的景観の再評価と保全及び修復・創出への応用に向けた課題整理を行った。

### 結果と考察

#### 1. 古来より人々に認知されてきた植物の変遷と生育立地

造園資料の少ない古代～中世の緑化文化を検討するため、主な和歌集に詠まれている植物および植物に対する行為を分析した。その結果、万葉集および第1～8集の勅撰和歌集の中で植物は計4,171首、植物に対する行為は計1,449首詠まれていた。緑化に関わる行為としては、植栽として「植える」「蒔く」「刺す（挿し木）」、植生管理として「刈る」「伐る」「抜く」「焚く・焼く」「切る」が認められた。また、奈良時代には植物資源材との多様な関わりが特筆された。一方、時代を通して多様な植物の植栽が行われていた。

和歌集に詠まれた植物の中でも、山上憶良が詠んだ“秋の七草”は、その美しさや風情を楽しむことで、古くから様々な人々に親しまれてきた。そこで日本最古の歌集である万葉集の中で秋の七草が詠み込まれた歌から、生育立地を「野」「山・岡」「庭」「街・里」に分類し、その特徴を検討した。その結果、七草全体では「野」に生育するものを読んだ歌が最も多く（49.7%）、また庭に植えたと考えられる植物種も多数見られた。さらに、万葉集で詠まれた歌数の最も多い「萩」について、適度な人の干渉が入る谷津田域の丘陵下部谷壁斜面下部の裾刈り草地に着目し、ヤマハギ節の生育分布実態および生育特性を明らかにした。その結果、調査地である塩田川流域（栃木県芳茂木町）では、ヤマハギ（*Lespedeza bicolor*）668個体、キハギ（*L. buergeri*）441個体が確認された。また、管理強度の

極めて強い農耕地および極めて粗放な樹林地の間にある緩衝帯となる半自然草地在が本種の主要な生育立地であることが確認された。

## 2.地域の重要な景観要素となってきた栽培植物の動態

伝統的利用に即した栽培植物について、その生物資源利用の歴史や地域景観の中での位置づけや現状・変遷の検討では、伊豆半島松崎町の桜葉畑景観、八溝山地南部域の漆掻き林、和歌山県みなべ町の梅林を事例に調査を行った。松崎町では、在来種オオシマザクラ (*Prunus Wilson var. speciosa Makino*) の芳香特性を活かした桜餅用の葉の塩漬けとして、100 年程前より生産されてきた。現在、国産の桜葉塩漬けの約 7 割を同町が生産しており、町民の貴重な収入源となっている。2012 年の悉皆分布調査により、桜葉畑の分布面積は約 6.5ha であり、主に町の南東部を占める岩科川流域に集中していた。かつて桜葉は炭焼きによるオオシマザクラの伐採・萌芽更新と連動して生産されており、炭焼きが盛んであった岩科川上流部は、良好な山採りの桜葉の採集地区であった。その後、舟運での出荷が有利な岩科川の河口部に桜葉の漬元が開かれたことで、上流部から河口部までの出荷ルートが確立した。燃料革命による炭焼きの衰退後、1960 年代末に分蘖栽培法という畑で連作可能な栽培法が考案されると、その経済性の高さから岩科川流域内の農家が一斉に桜葉畑を上げたのである。しかし、今日では価格の低迷による担い手の減少等により、桜葉畑の分布面積は最盛期から半減していた。ただし、地形勾配の急な場所でも桜葉畑が継続されている地点が多く、畑の放棄はアクセス性に不利な場所から進むと考えられた。一方、桜葉畑は棚田のような条件不利地域の農地の保全機能や石・刈り草等の有機質資源の地域内循環との結びつきが示唆された。

八溝山地南部域(栃木・茨城県)には、ウルシ (*Rhus verniciflua Stokes*) の栽培地(漆掻き林)が点在している。当地域で最も主導的な漆掻きを行っている A 氏(1944 年生)が管理する漆掻き林(2.5m 以上のウルシが 5 本以上生育)は、30km×20km の範囲に約 200 地点あり、平均 48 本/地点であった。一方、漆掻き作業の効率向上のため、ここ四半世紀の間に漆掻き林の立地は農村の余白地である土手や山裾から、耕作地跡地へと移行していた。ただし、土手における管理林のススキクラスの種の豊富さおよび常在度の高さが特筆されたのに対し、耕作地跡地ではその出現種数が劣り、常在度も低くなっていた。すなわち伝統的な立地における半自然草地の質の高さが明らかとなり、それはウルシの経済性に伴う林床管理が寄与していると考えられた。上記の 2 つの事例では、桜葉畑と漆掻き林という人の営みを感じさせる景観要素が地域に点在することで地域固有の文化的景観が成立していたが、今日の農村の人口の減少・高齢化や耕作放棄等により分布の減少や存在形態の変化が生じていた。一方、和歌山県みなべ町では、江戸初期における痩せ地に対する梅の栽培推奨が契機となり、江戸期にかけてその栽培が街道沿いの沿岸部に広まり、観梅の名所として知られるようになった。ただし、その時代の観梅は平坦に広がる梅林の中を歩き、香りを楽しむというものであった。しかし明治期に入り、より経済性のある桑畑への転換により海岸沿いの梅林は消滅し、大正期以降は内陸の川沿いの低平地に、次いで丘陵地へと梅林の中心は移っていった。これに伴い、幾重もの丘陵稜線が続く俯瞰景としての梅林が成立し、より視覚的に秀麗な“観梅”が可能となった。さらに 1965 年に優良品種「南高梅」が種苗登録されたことにより、町全域へ梅林が拡大した。現在、中心的な南部梅林では、観梅協会や梅栽培農家、地域住民による観梅期間中の縁日的な空間の演出による地元の収益獲得の仕組みが認められた。このように、地域農家が梅生産を連綿と続けてきた歴史、起伏のある立地を活かした観梅スタイルの確立、町全体での観梅ムード溢れる梅の里としての地位獲得が累積することで、当該地域の文化的景観が成立していた。

### 3.半自然草地の生育地の復元・創出の可能性

農村景観の要素であり、秋の七草の生育地としても重要であった「野」、すなわち半自然草地の復元・創出に向けた畦畔表土の移植実験では、移植表土の厚さ、攪拌の有無による成立植生への影響を検討した。その結果、種数の差は見られないものの、攪拌区での一年草、マット区での多年草の割合の高さが特徴的であった。また、採取表土の深さによる差もほとんどなかった。ただし、マット区では多年草が含まれる現存植生が維持されたまま移植先に定着したため、安定した植生を早期に形成した。一方、移植後に多くのススキクラスの種が出現していることから、これらの良質な半自然草地の要素が移植表土に含まれることが在来植生回復において重要と言える。

#### まとめ

万葉～平安期の和歌集の調査により、古来から植物資源利用を通して植物との多様な関わりがあったこと明らかになり、特に「野」すなわち半自然草地は人々に親しまれてきた“秋の七草”に代表される多様な草花が生育する空間であった。しかし、かつて身の周りに普通にあったと思われる「野」の景観は、現在、植物資源利用の減少や農村の変質により減少傾向にある。一方、事例調査で示した様、桜葉、漆、梅といった植物資源利用に伴う地域固有の景観が形成されていた。松崎町の桜葉畑景観での在来種オオシマザクラの特性を活かした栽培法の確立とその歴史性、農地保全と有機質資源の地域内循環との繋がり、八溝山地南部域の漆掻き林での伝統的立地及び林床管理による生物多様性との繋がり、みなべ町の梅林での梅栽培の歴史性と立地特性を活かした景観の秀美性等、それぞれの地域に即した機能や性質を有していた。これらの様々な機能や性質が多様かつ複雑に関係するほど地域固有性は高くなると考えられる。そして文化的景観の維持・形成には、その機能や性質をいかに保持・再形成していくかが課題となる。本論では、移植実験により文化的景観としての「野」すなわち半自然草地の復元・創出の可能性を検討し、その結果、半自然草地の復元の可能性が示された。一方、採取表土の質の重要性が示唆され、課題も多い。今後は、文化的景観を創出する技術的な研究の進展が求められるが、それに加えて様々な特性や機能を持った文化的景観が身の周りにあることへの価値認識やその意義の啓発も文化的景観の維持・形成において重要な課題である。